

研究主題「肢体不自由のある児童の選択する力を育むための指導の工夫

—国語・算数の授業における教師による話し掛けの改善を通じて—

東京都教職員研修センター研修部教育経営課
都立城南特別支援学校 主幹教諭 中澤 絵麻

第1 研究のねらい

肢体不自由のある児童・生徒は、身体の動きに困難があることなどから、幼児期より周囲の人々から多くの支援を必要とする一方で、人との関わりが受け身になりやすい。その結果、自分で何かを選択する力が伸びにくい。日常生活を考えたとき、例えば、自らの意思で食事のメニューを選んだり、着る洋服を選んだりする力を育むことは、自分の生活をより豊かなものにするために重要なことである。

肢体不自由特別支援学校の自立活動を主とする教育課程では、国語と算数のねらいを合わせて学習する「国語・算数」の授業が設定されている。例えば、物語の読み聞かせの後、物語の活動を実際に体験したり、登場人物の役を選んだりする活動が取り入れられている。特別支援学校小学部・中学部学習指導要領（平成29年4月告示）の国語では、「身近な人からの話し掛けに注目したり、応じて答えたりすること」、「伝えたいことを思い浮かべ、身振りや音声などで表すこと」と記されている。また、特別支援学校学習指導要領解説各教科等編（小学部・中学部）（平成30年3月）の算数では、「具体物の『ある』『ない』が分かり、具体物を指差したり、つかもうとしたりするなど、具体物を対象として捉えることについて指導する」と選択する力の基礎となる内容が示されている。

さらに、特別支援学校教育要領・学習指導要領解説総則編（幼稚部・小学部・中学部）（平成30年3月）では「教師の話し言葉などが児童の言語活動に与える影響が大きいので、それを適切にするよう留意することが大切である」と教師の話し掛けの重要性が示されている。

そこで、教師の言葉や話し掛けに着目した指導の改善を通じて、児童の選択する力を育むことをねらいとして研究を進める。

第2 研究仮説

肢体不自由特別支援学校小学部「国語・算数」の学習において、教師の話し掛けに着目した指導を改善すれば、児童の「選択する力」を育むことができるであろう。

第3 研究の内容と方法

1 基礎研究

(1) 先行研究

平成29年度特別支援教育研究開発委員会「障害の重い児童・生徒における言語活動の指導内容・方法の改善・充実」や、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所の「肢体不自由教育」及び「重複障害教育」の報告等より、児童の選択する力を育むために教師の話し掛けの配慮が大切であることが分かった。

(2) 「選択する力」と「教師の話し掛け」の定義

先行研究から、本研究における児童・生徒の「選択する力」を、「提示された複数の具体物から、見る・触れる・手を伸ばす等の有する能力を活用して選ぶことができる力」、また、「教師の話し掛け」を「授業中に教師が児童に対し、発問を含めながら話すこと」と定義した。

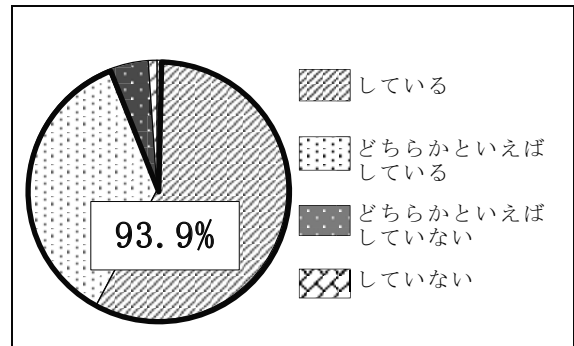
2 調査研究

都立特別支援学校における児童・生徒の「選択する力」と「教師の話し掛け」に関する取組や意識を明らかにするために、特別支援学校6校556名の教師にアンケート紙による調査を実施した。

(1) 児童・生徒の「選択する力」に関する結果

児童・生徒の選択する力を育むために、選択の機会を設定しているかの設問に対して、肯定的回答は、93.9%であった（図1）。

また、授業において選択の場面をどのくらい設定しているかの設問に対して、「ほぼ毎日」が57.2%、「週に3回以上」が24.5%の回答であった。



(2) 小学部における「教師の話し掛け」に関する結果

ア 教師が、児童・生徒に話し掛けるときにどのような配慮をしているかという設問に対して、「事前に発問計画を練る」が83.5%の回答であった。また、そのうち93.1%が「児童・生徒の表出が増えた」と回答した。

イ 教師が話し掛けで配慮していることでは、「話すスピード」と「話す間を置く」という項目において、強い相関関係（相関係数 0.78）を示した。「話すスピード」に配慮している教師は、同時に「話す間を置く」配慮もしていることが分かった。

以上の結果から、児童・生徒の選択する力を育むために、選択の機会を設定し、事前に発問計画を練ることが重要であることが分かった。そこで、本研究では発問計画を練るために「教師の話し掛けシート」を作成し、主に「話すスピード」と「話す間を置く」工夫を行う。また、児童の選択する力を評価するために、児童の「選択するカシート」を作成する。

3 開発研究

(1) 「教師の話し掛けシート」について

「教師の話し掛けシート」では、教師のふだんの話し掛けと、それと対比させた工夫後の話し掛けを記載する。また、教師があえて話し掛けず「話す間を置く」工夫をしているところは斜線を記載する（表1）。

表1 「教師の話し掛けシート」（一部抜粋）

ふだんの自分の話し掛けを書き出す	（話すスピード・話す間に配慮）
ここに積み木がありますね。本の中にもありましたね。	積み木Aがあります。
きれいな色ですね。赤、青、黄色、たくさんの積み木です。	積み木Bがあります。
この中から1個選んで、選びましょう。	1個選びます。どちらがいいですか。
どの積み木がいいか、よく考えてください。	あえて、教師が話し掛けず、間を置く。
誰から選ぼうかな。一番に選びたい人はいますか。	

(2) 児童の「選択するカシート」について

児童の「選択するカシート」では、「目の前の教師に注目する」、「提示された積み木Aを見る」等、7点の行動項目に分け、児童の様子を記載する。

初期状態ではシートに○が記載されており行動項目を達成した場合、○内を塗りつぶすようにする（表2）。

表2 児童の「選択するカシート」（一部抜粋）

	行動項目	1回	2回
1	目の前の教師に注目する。	○	○
2	提示された積み木Aを見る。	○	○
3	提示された積み木Bを見る。	●	●
4	積み木Aと積み木Bを見比べる。（視線を動かす。）	●	○
5	1個の積み木を見る。	○	○
6	選んだ方の積み木に手を伸ばす。または、伸ばそうと手に力が入る。	○	○
7	選んだ積み木に触れる。	●	○

4 検証授業及び検証授業の分析

(1) 検証授業の概要

都内肢体不自由特別支援学校小学部低学年自立活動を主とする教育課程の学習グループにおいて、国語・算数の単元「つみき」の授業を全9時間で実施した（表3）。

表3 単元計画

次	時	主なねらいと学習活動（○は主なねらい、・は学習活動）
第1次	1・2・3	○絵本（教科書）の読み聞かせの声や効果音に気付く ・読み聞かせを聞く ・絵本の場面を再現 ・選択する活動
第2次	4・5・6	○感じたことを表情や視線、身体の動きで表す ・読み聞かせを聞く ・絵本の場面を再現 ・選択する活動
第3次	7・8・9	○提示された教材の興味のある1点を選ぶ ・読み聞かせを聞く ・絵本の場面を再現 ・選択する活動

学習活動の選択する活動では、提示された複数の積み木から1個を選択する場面を設定した。教師の話し掛けの改善による効果を明らかにするため、第1次では教師はふだんの話し掛けをし、第2次から第3次まで「教師の話し掛けシート」を活用した「話すスピード」と「話す間を置く」工夫をした。

(2) 検証授業の分析

ア 児童の「選択するカシート」を用いた評価

毎授業後、教師が児童の行動項目について達成した○の数を評価した。

対象児童5名について達成した行動項目の平均は、授業回数1回目では、2.8項目で、9回目では、6.2項目に上昇した。達成した項目の増加は、平均3.4項目であった（図2）。

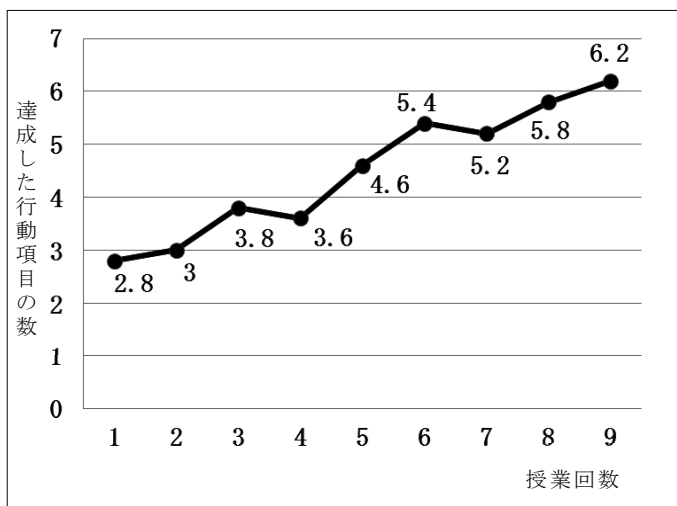


図2 授業回数と達成した行動項目の数の平均

イ 検証授業前後のビデオ分析

教師の話し掛けの工夫前後の選択場面を比較し、児童の変容を分析した。

(7) 「話すスピード」の工夫

第1次の教師のふだんの話し掛けでは、教師は児童が積み木に視線を向けるように、話し掛けていた（図3）。しかし、児童の視線は積み木に向かず、話し掛ける教師に向いた。

一方、第3次では話し掛けを精選し、話すスピードをふだんよりもゆっくりする工夫をしたところ、児童は提示された積み木に注目した。

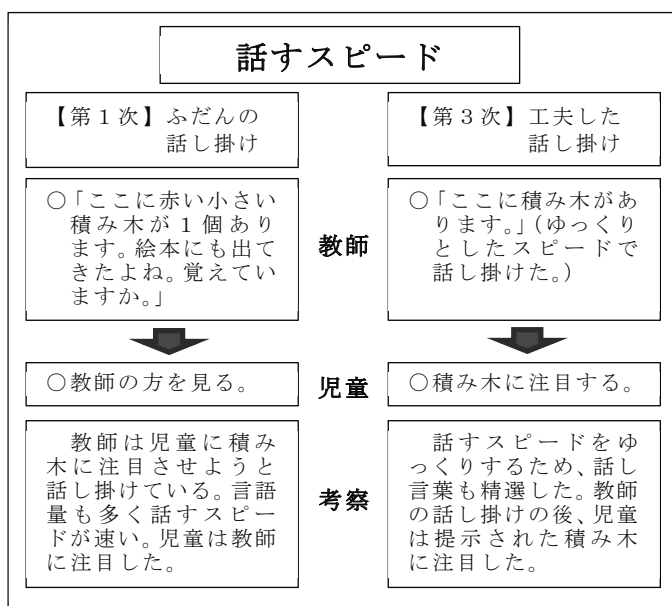


図3 話すスピードの工夫前後の分析

(4) 「話す間を置く」工夫

第1次のふだんの話し掛けで教師は、選択することや積み木に注目するようにを何度も促した。しかし、児童は学習活動とは関係のない手の動きを示しながら、隣の児童を見ていた。

第3次の「話す間を置く」工夫をしたところ、児童は手の動きを止めて、考えているような表情を示した。

教師はその表情の変化を読み取り、結果として、約8秒の間を置いて児童を観察すると、児童の視線が1個の積み木に向いた(図4)。

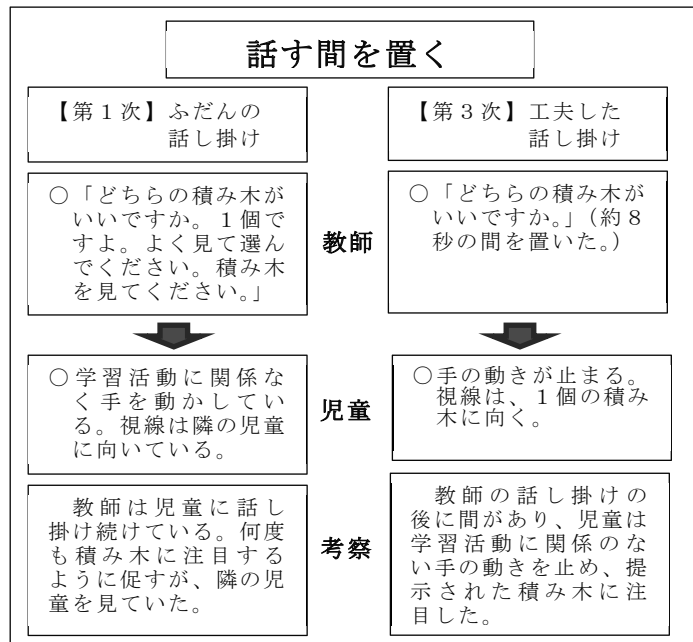


図4 話す間を置く工夫前後の分析

ウ 教師のインタビュー調査

検証授業前後の児童の変容について教師にインタビュー調査を実施した。調査結果より、児童の変容と同時に、教師の児童への関わり方が次のように変容したことが分かった。

- ふだんの話し掛けでは、児童に発問を言葉で伝えようと間を置かず何度も話し掛けていた。話す間を置くと、児童が考えている様子が表情から分かり、間を置き続けたところ積み木に手を伸ばした。
- ゆっくり話すことを意識すると、児童と目が合う時間が増えた。そこで児童の表情を観察する余裕もできた。そのため、「積み木に視線が向きそうだ」や「右側の積み木を選択しそうだ」という予測ができ、児童の表情から、表出するまでの間の置き方も次第に分かってきた。

(3) 検証授業の考察

検証授業の分析より、児童は、国語の単元目標「教師からの話し掛けを受けて、簡単な動きや表情等で気持ちを表すことができる。」を達成できた。また、提示された複数の積み木を見比べて1個を選択しようとしていたことから、算数の単元目標「提示された教材に注意を向けることができる。」や「諸感覚を活用して教材(積み木)を選ぶことができる。」を達成できた。

第4 研究の成果

教師が事前に「教師の話し掛けシート」を活用して発問計画を練り、話し掛けの改善をして、授業後に児童の「選択する力シート」で評価することは、児童が複数の具体物から興味のあるものを選択する力を育むことに有効であった。

また、児童の選択する力を育むために重要なことは、話し掛けに対する児童の様子を教師が注意深く観察し、「積み木に視線が向きそうな表情」や「選択しようとする動きの兆し」という児童の微細な変化を、読み取ることであった。

第5 今後の課題

開発した「教師の話し掛けシート」と児童の「選択する力シート」を、他の学部や各教科等において活用する機会を設定していく。また、国語・算数の授業で育んだ児童の「選択する力」を、日常生活の場面でも発揮していけるようにしていく。